

# 政治発言

オックスフォード引用句辞典

アントニー・ジェイ [編]

和田宗春 [訳]

はる書房

Selection and arrangement © Antony Jay, Oxford University Press 1996

Introduction © Antony Jay 1996

“The Oxford Dictionary of Political Quotations” was originally published in English in 1996.

This translation is published by arrangement with Oxford University Press.”

## 序

「何か書かねばと苦しんでいる人がこの本のページを繰れば、教養高い雰囲気はいくぶん添えるためであれ、自分で考える煩わしさを免れるためであれ、多くの優れた名言を見出しました書きとめることだろう。」バーナード・ダーウィンが「オックスフォード引用句辞典」初版の序で記した語句は、55年前と変わらず今も正しい。しかし引用句を用いるに当たっては、特に政治の世界ではさらに妥当な理由がある。

ある事業または政策への支持を盛り上げようとする時、過去の偉人たちを引き合いに出すのは至極当然のことなのだ。彼らの名声が論議に知的な重みと道徳的説得力を与える。彼らがすでにこの世にいず、テレビに出演して自分たちの主張はまったく違うのだ、と発言できないからである。

おそらく、著名人による支持よりもさらに重要なのは、時間に磨かれた知恵であろう。政治分野の新しい考え方は常に疑われるものだが、引用句を用いることで、自分の考え方が新しく傷つきやすい若木などではなく、政治社会の歴史に深く根ざしていることを示せるのである。

刑罰は社会復帰の機会を与えるのではなく、むしろ見せしめだと主張する人々は、時代遅れだと感じるかもしれないが、アイスキュロス Aeschylus を参照すれば、信念が 2500 年の由緒あるものであることを論証できる。

ヨーロッパと緊密に連帯することに批判的な人々は、19 世紀ではバジョット Walter Bagehot の「イギリス国民はいかなる国にもまして、外の世界から切り離され……孤島となっているのではないか？ 現代ヨーロッパの一般的な政情動向から外れていないのか？」を引用し、また 18 世紀からはギボン Edward Gibbon の「ヨーロッパに多数の独立国家をつくることは、互いに宗教、言語、生活様式が類似し関連しており、人類の自由にとって最高の有益な結果をもたらすのだ。」を引用して、連帯に反対する十分な理由も論拠もあるという信念には何ら新奇さがなかったことがわかる。一方ヨーロッパ寄りの人々は、19 世紀に首相を務めたソールズベリー卿 Lord Salisbury の発言を楯にできる。「われわれはヨーロッパ共同体の同志だ。その通りに行動する義務を果たさなくてはならない。」さらに時には、引用句は知的な支えとしてだけではなく、劇的な効果を上げる魔力を持つものであるかのように使われることがある。

今も語りつがれる二人の首相がこの力を感じていたはずだ。最初は

1940年のチェンバレン Neville Chamberlain で、レオ・アメリー Leo Amery が、残部議会に対するクロムウェル Oliver Cromwell の歴史的発言を引用した時のことだ。「あなたは世の中のため献身しようとしてここに長いこと座りすぎた。出ていけ、と言おう。私たちに処遇を任せよ。神の名にかけて、去れ！」チェンバレンは出ていった。2人目は1963年のマクミラン Harold Macmillan で、同志である保守党議員ナイジェル・バーチ Nigel Birch がブラウニング Frederick 'Boy' Browning の「失われし指導者」をとどめの一撃として引用した時だ。

人生の夜が始まった。彼を戻って来させるな！  
われらには疑いやためらいや苦痛があり、  
彼を賛えよと強えられるが——黄昏の光の瞬きだ、  
喜びと自信に溢れた朝は2度と来ない！

どの道マクミランの運命は定まっていたのだろうが、バーチの引用句はブルータスの短剣のごとく彼の失脚を確かなものとした。本辞典は、少しの教養の香りだけを求めたり、考えることを避けようとする人々のみならず、議論や意見を栄えある先祖や古き系図を論拠として主張しようとする人々にも役立つものであろう。

しかし本書は、単なる政治的な機知や知恵の名文集ではない。まず第1に、そして何よりも、信頼するに足るデータ・ブックである。本書に収録するにあたって最も重視した選択基準は、古典性でも深遠さでもなく親しみ深さである。政治的演説や文章の決まり文句の一部として、英語使用地域全体に通用する政治的引用句は山のようにある。そのすべてが本書に採録されてしかるべきであり、もし落ちがあれば（もちろん時間に余裕のある鋭い読者が明らかな遺漏を指摘することは確実だが）、責めは編者が負うべきものである。

中心となるのは世界的に著名な政治的引用句だが、それよりもはるかに多く収録されているのは、長く引用されて来たにもかかわらず、発言者とされる人々のものとは直接には認めがたいような言葉である。編集上の判断を必要とするところであり、遺漏があった場合も謝罪よりは弁解ができるものとする。しかしどちらの場合も、鍵となるのは「これは信頼に足るデータ・ブックに必要なものか？」という問いであった。本書が対象とする主な読者は2種類ある。まずは、ある引用句にぶつかって、または一部を思い出して、これを確かめよう出所を明らかにしようと思う人々であり、もうひとつはあるテーマにそって、あるいは特定の著者の引用句を探そうとする人々である。

しかし多くのデータ・ブックは目的を追い求める狩人を惹きつけるのと同様、拾い読みや目的のない漫然とした読書を楽しむ人々をも惹きつけるものだ。政治的引用句辞典は、そのリストのほとんどトップを飾る

ものであるに違いない。確認や照合と同じく発見の喜びをも与えるものなのだ。本書は、名言集として編集されたわけではないが、名言集を読む喜びも得られるはずである。だからこそ私は、多くの場合に、純然たるデータ・ブックであれば必須であるような情報よりも、その発言がもたらされた状況の情報を載せようと努めた。引用句の中には（例えばウェリントン Duke of Wellington の「もしあなたがそう信ずるなら、何でも信じることになるだろう。」など）、専門的な読書家でない限り、前後関係についての説明がなければほとんど理解し難い言葉もある。

文言から表面上は理解はできるが、例えばマーガレット・サッチャー Margaret Thatcher の「さて、いつものような仕事になるに違いありません。」と同じく発言された背景を知っていればさらに面白くなる言葉もある。本辞典がテーマ別ではなく発言者や著者名別に編集されているのも、同じ理由による。

私自身、テーマ別の編集には心から満足したためしがないのだ——私はいつも、テーマ別に採録された項目について、別の見出しに分類されてもおかしくないという詮索をしてしまうし、その見出しはいくつもある出典や発言者名に従って分類すればこの憂いを免れる上に、データ・ブックという目的のためには、出所による配列はテーマ別の配列と同様に役立つものである。「政治発言」辞典には、この形式が特に便利である。

特にランダムに拾い読みをする読者には、個人——ロイド＝ジョージ David Lloyd-George、トクヴィル Alexis de Tocqueville、ハリファックス Lord Halifax (‘the Trimmer’)——が行った複数の発言を通して、その人が何を言ったかだけでなく、人格や個性についてもす早くかつ生き生きと知ることができるのである。本書はまったくのデータ・ブックではあるが、私たちが今日生きている政治社会に至る歩みをはっきりと記してきた意見や思想や個性の概要を示す書としても、完全に系統立ってはいないにせよ、多くの読者に使っていただければ本望である。

では、ある引用句を政治的な句であるとするものは何であろうか？ もちろん、多くの場合答えは明らかである。

まず政治についての一般的真理が候補として挙げられる。アイスキュロスの「何人も異邦人を責むるには急なり。」、ベーコン Francis Bacon の「高位へのあらゆる昇進は螺旋階段を上るようなものだ。」、バーク Edmund Burke の「課税してなお人民を喜ばせることは、愛してなお賢明であることに劣らず人間には不可能である。」などである。また、特定の出来事や個人についての引用句が言いまわしとして定着したのものもある。デズレーリ Benjamin Disraeli の「つるつると滑る棒の先端に上りつめた。」、メアリー・チューダー Mary Tudor の「私が死んで遺体を切り開いてみれば、カレー港が心に葬られていると知るでしょう。」など。誤って引用されることの方が多いにしてもである。引用句のうちの

あるものは、その発言者ゆえにここに収録される価値がある。もしあなたや私が「私の生きているうちは女性が首相になることはない」と言ったところで、本辞典に収録されることは期待できない。マーガレット・サッチャーがこれを言ったとなれば、事情は一変する。

しかし、明らかに政治発言であるものとそうでないものの間には、どちらなのかよくわからないという領域がある。「嘘がつけない、パパ。嘘がつけないと知ってるでしょ。ぼくが手斧で切りました。」という言葉は、政治に直接関わるものではないが、ワシントン George Washington の個性をよく示しているがゆえに、声望を立証するものとして引用される。ゆえに非採取とするなど論外である。では著名な人物が書いた文学上の語句や、その人柄から発せられた言葉についてはどうだろうか？ マコーレー Lord Macaulay の詩やディズレーリの小説などである。

もし本辞典に掲載しないなかに「スチュアート王家派の墓碑銘」を含んでも、不平等であるとは言われまい。サイベルの「2 国家の演説」は、今も保守党の内輪もめの核心をなすものだ。

もう1つの曖昧な境界線は、多くが政治と重なる領域である法律、福祉、王権、経済等の見出しの下に分類される方が適当であるようなものと、政治発言とを区別する境界線、というか区別しがたい境界線である。

もしこれらのテーマにそったそれぞれの「オックスフォード引用句辞典」があるとすれば、アダム・スミス Adam Smith の「同業者仲間は、楽しみや気晴らしのために集った時でさえ、会話は社会公共に対する陰謀、すなわち値段をつり上げるある種の方策の話になる。」という観察をどこに収めるべきかが、議論的となるだろう。つまりは「オックスフォード経済引用句辞典」が（まだ）ないために議論になっていないだけである。

「オックスフォード政治逸話集」という優れた本があり、引用句の出典は逸話なのだ。以下のような逸話は載せたい誘惑があったのは間違いないだろうが、記載されていない。保守党のイアン・マクラウド Iain Macleod は、1964年に政権を失った後欠席が多く、野党幹部議席にある彼の席は、空席が目立っていた。ウィルソン Harold Wilson 首相がこれを知ったのは、保守党の陣笠議員たちがよく文句を言うからだ。ある日、マクラウドが現れた。首相にきびしい質問を行うためだった。ウィルソンは立ち上がり、一息おいて言った。「その議席によく座っていらっしゃいますか？」これは保守党幹部議員への陣笠議員の歴史に残る笑いのひとつになった。

しかし「ここにはよくいらっしゃいますか？」がどうして政治発言に聞こえようか。ひとえに逸話の一部であり、除外されねばならなかったのだ。

もちろん、あらゆる政治発言が政治家の発言であったり、政治についてだったりするわけではない。ルイス・キャロル Lewis Carroll は間違い

なく政治家ではないし、「鏡の国のアリス」も同じく間違いなく政治的著作ではないが、「ジャムの約束はいつも明日」や「ただ話したいために選んだ言葉だ——それ以上でもそれ以下でもない。」は政治討論でいつも引用されている——その例としてトニー・ベン Tony Benn の引用を挙げよう。「明日のジャムにするつもりだったうちのいくらかを、もう食べてしまったのだ。」もしこれを入れなければ、本辞典は読者の役に立たないだろう。政治家はもはや、かつてのように意のままには詩を引用しなくなったが、それでも近年の政治の研究者は詩の引用や詩人についての言及を多く確認している。

今日でさえ、キプリング Rudyard Kipling の「デー人への租税の支払い」やチェスタトン G. K. Chesterton の「秘められた人々」、そしてかのブレイ村の教区牧師を仄めかすおびたしい表現に会うのである。そしてもちろん、他の追隨を許さぬ頻度で引用される一人の詩人（といえばシェイクスピアである）がいる。

彼が政治的な状況においてこれほどよく引用されるのは、単に文章が力強く幅広いためのみならず、多くの戯曲がテーマや登場人物やその対立において、あまりに強烈に政治的だという事実による。もし読者が、本書でシェイクスピア William Shakespeare が多く取り上げられすぎていると感じられるなら、私はただ、彼が多すぎるスペースを与えられたように見えることはよく承知しているが、初版での彼の項はもっと長かったのだ、と言えるだけである。整頓を行ってきたのだが、残っているのは、失うものなしには落とせないという編者の判断を代表するものばかりなのだ。

同様にスペースを占めて見える文筆家（シェイクスピアは唯一の詩人だが）は1人だけではない。4人の偉大なる国家指導者——チャーチル Winston Churchill、ディズレーリ、ジェファソン Thomas Jefferson、リンカン Abraham Lincoln——は、同時代人にも後継者たちにも際限なく引用されてきた。確かに彼らには言葉の才能があったが、生存中に達成した名声もまた、有名でない同時代の人々に比べて彼らの発言が細かく記録され繰り返して使用されている理由であるように思える。

本書には、世界的名声はないが目立って大きく扱われている人物が2人いる。パーク Edmund Burke は実際に政治家ではあったが、彼らほどの大物ではなかったし、バジヨットは議員でさえなかった。しかし2人は常に誰にでも覚えやすくまた誰にもそれ以上うまくは言えない形で、発言や主張を表現する言い方を見出してきた。発言のあるものは彼ら自身のものだが、そうでないものでも頻繁に繰り返されてきたことが証明されている。彼らはポープ Alexander Pope の次の定義を体現しているのである。

ほんとうの機知とは美しい衣裳をまとった本質、

しばしば考えられてはきたが、これほどうまくは表現されなかったもの。

編者は、彼らが要求するスペースの広さについては謝罪の必要を感じない。

あらゆる引用句辞典が直面する、独特の危険性がひとつある。他の諸辞典にすでに記載のあるものばかりを、載せてしまうという危険である。もちろんその多くが他の引用句集にも見られるものであることは避けがたいのだが、辞典編集者が同じ資料ばかりを使うべきではないということも同様に重要である。

もし引用句が政治的コミュニケーションを新鮮な活気あふれるものにするものならば、汲み取るべきは澱んだ沼ではなく生き生きとした流れであろう。そういうわけで、本書の出発点はオックスフォード大学出版会の棚に保管されている政治発言の現存資料ではあるが、単なる出発点に過ぎない。新しい資料を持ちこむための主な方法は、研究者がチームを組んで日刊紙や定期刊行物をしらみつぶしに探し、ラジオやテレビ番組を視聴して、出てきた重要な引用句をすべて記録し、検討を重ねることだった。もう一つ重要な情報源であったのは人々とのやり取りである。

生きた引用句辞典ならば当然現在生きている人々の発言から引用句を入れるべきである。人々の多くは寛大にも、彼らの発言を確認し出典を明らかにしたのみならず、引用されているのに気がついた他の著作や発言をも提供してくれた。生者はまた死者との仲をも取り持ってくれたのである。例えば、最初の選択を終えた時点の草稿では、私が見てきたあらゆる引用句辞典と同様、イギリスの最も偉大な首相の1人口パート・ピール Robert Peel の発言からの引用句が不当なほど欠けていた。彼が残した引用されるに足る言葉がそれほど少ないとは信じがたいことだった。

そしてピールの代表的権威であるノーマン・ガッシュ教授に宛てた1通の手紙から、責められるべきはピールではなく記録であると証明したのである。今やピールの項目は十分に整っている。同様に、もしヘンリー・テイラー Henry Taylor の『政治家』についてダークル卿のご教示を頂かなければ、19世紀において最も政治的に機敏であった官僚は姿を現さないままであったろう。

ここから、「政治発言とは何か?」という疑問の最終的な側面が導かれる。すなわち、「引用されてきたものであるのか、あるいは引用に値するというだけで十分なのか」ということである。もし引用に値することを基準として採用するならば、読者は名言集や備忘録の広大な平野に位置する滑りやすい坂のふもとに身を置くようなものである。「オックスフォード引用句辞典」の初版の編者たちは迷わなかった。

「選択作業の間、記載項目を実際引用されたものにとどめ、編集者や



寄稿家が引用に値すると信じたり、望んだ言いまわしを採用しないようにするために、大変な努力を払った。」もちろん彼らは正しかったのである。

それでも大変な努力を払ったと言っているだけで、完全に意図したとおりにできたとは言っていないのだ。私も同様のことを告白せねばならない。もちろん本書は本質的には実際引用されてきた言葉の辞典である。私は滑りやすい坂でほんの1、2歩足を滑らすように、現代の読者が引用したいと思うであろうと考える数行を入れた。結局のところ、いつどこで引用されなかったと、知り得ようか？ 私は、自分の判断で勝手ながら、レアティーズが王位継承者との結婚についてオフィーリアに与えた忠告を入れることにしたのである。

だが、ご身分を考えてみる、あのかたの意志はご自分のものではない、あのかたも生まれには従わねばならぬ、身分卑しいもののように、勝手気ままに生きることは許されぬのだ。あのかたの選ぶ道はただちに国家の安寧・福祉の存否にかかわってくる。

とすれば、妃を選ぶときも、ご自分を主君と仰ぐ国民全体の賛否に左右されることになる。……

どこで政治的に引用されたという記録はないが、皇太子の離婚と再婚について現在継続中の論議に鑑みて、多くの人が覚えておきたい言葉なのではないかと私には思えたのである。実は本文が印刷に回された直後に、スタンレー・ポールドウィン Stanley Baldwin が下院で同じ言葉を、エドワード8世 Edward VIII の退位にからめて引用していたことを発見した。かくて本書にほんの数項目——パーセンテージにすればごく僅か——過去に引用されたと断言できないが、されていないとも言えない項目がある。これらはまた、政治発言の池が澱むことを食い止めるもう一つの方法でもあるのだ。

さらに疑問のもう1つの側面は、政治発言はどんな時に政治発言でなくなるのか？ というものである。ビスマルク Otto von Bismarck のバルカン半島での対立には「健康な身体を持ったボメラニア人擲弾兵1人の価値もない。」、という意見を、歴史的な解決済みの項目として扱うのは簡単なことであった。だが1995年には国連の役割とボスニア問題の下院での討議で再浮上したのである。

もし私が実際引用されたものよりも、引用される価値のあるものを採取するという姿勢をいくばくか通したとするならば、実例との照合や出所確認を経たものではないものになる。出版会の同僚たちは、引用の実例を検証することにかけては厳密かつ徹底的であり、記載を約束されていた多くの走者が最後の垣で落伍した。そのなかには「左側に敵はいない」や「誰が政権の座にあらうと、保守派は常に権力を持つ」など耳

になじんだ語句もあった。除外された語句のうちの2、3については、個人的に特に惜しく思っているものもある。ベーコンが「時間をその一員として召集しない議会は、時間が認可しない。」と言ったことは確かだと私は思うのだが（そして私が捏造したわけではないのも絶対に確かなのだが）、また彼が「大きな出来事は小さなきっかけでも起こるが、小さな理由で起こるのではない」と言ったことも確かだと思うのだが、調査では出所を突き止めることができなかった。

グラッドストーン William Ewart Gladstone について、次のように言った人物が誰かがわからなかったのも残念である。グラッドストーンが演説を書く時は、自分の議論の海岸線にあるあらゆる湾や岬に従ったのみならず、あらゆる川を水源まで遡ることを主張した、というものだ。また政府機関とは過去の問題の記念館だ、と言ったのはアメリカの学者ドナルド・ショーンだと私は確信しているのだが、証明できなかった。

もう1つ残念なことは、引用の実例が項目選定より遅かったというものである。特にシモン・ペレスの「テレビは独裁制を不可能にしたが、民主主義を耐えがたいものにした」という洞察である。しかし我々は、イゼツベゴヴィッチ Alija Izetbegović 首相が Dayton 協定にサインした後の発言には遅れを取らなかった。「国民に言いたい、確かに平和とは言えないことかもしれない。だが、戦争継続よりはましなのだ。」

おそらく引用句の中で最も問題が多いのは、ごく最近のものである。最終的には、ある意見が認められるかどうかの判断を下したのは時間であり、また「犯罪に対しても犯罪の原因に対しても、断固たる態度を取る」が当クラブの正規会員なのか短期訪問者なのか、を言えるのは時間だけであろう。

しかし一方で、最初の引用例から10年なり20年なり認定期間を設定すれば、読者が望む多くの引用句を除外することになる。思うに、いずれ次の版が出る時には、最近の時事問題についての項目が生き残れないことになるのではないか。

では演説の執筆者についてはどうか？ 近年の問題である。過去の政治家が誰かの補助を得てきたことは確かだろうが、しかしリンカンやディズレーリやロイド＝ジョージやチャーチルが、控え室にいる仲間に演説のアイデアを求める図など考えがたい。今日では何人かの演説執筆チームが国際的な指導者の側近の一員となっており、有名な発言などは語ったご当人とは別人の手で作られた贗金だということを、私たちは時折、非公式に耳にする。書いた本人の名前を探して当然の認知を与えるべきなのであろうか？ それは不可能な仕事だろう。読者はその発言を伝えた政治家の名前で探すであろう。また引用句は政治家が全国的にあるいは国際的に流通させる前から、すでに流布しているものだというのも事実なのだ。私たちは引用句を最初に口にした人物までたどってその人のものとしているが、政治家の発言は、彼ら自身の手になるもので

はないということは認めねばならない。それでも彼らは常にその発言と結び付けられるだろう。

「はっきり言えばね、君、まったく気にしてないよ」という言葉がマーガレット・ミッチェルやシドニー・ハワードではなくクラーク・ゲーブルと結び付けられるように（この発言は政治家たちのコメントになり得るだろう）。

もう1つ、最近の引用句を載せるにあたって難しいのは、全国あるいは国際社会に伝わった元の発言が、印刷された形にならないということである。

ラジオやテレビの資料館は常に公開されているとは限らないし、求めるものがはっきりしている場合でさえ、そこにたどりつくまで大変な苦労と時間を要する。曖昧な記憶や大体の関連事項しかない場合は、新聞や縮刷版資料館であればごく簡単に見つかるのだが、どこにあるのか捜し当てるのは事実上不可能である。

もちろん記憶されるべき引用句はいずれは印刷されるのだが、その最初の形では限らないのだ。マイケル・ドブズ Michael Dobbs の『トランプで建てた家』に出てくる筆頭院内幹事の常用された発言「都合良く考えているようですな。コメントできません。」は、テレビの脚本から取られたもので、原作には出てこない。同様に、テレビやラジオの記録では言葉のどこが強調されたかやニュアンスといった重要なことが失われてしまう。ニール・キノック Neil Kinnock が労働党大会でリヴァプールの議会の報告をした時、強調したのは「労働党」という言葉であった。「労働者に内容のないメモを手渡しつつ、街中を雇上げのタクシーであちこち逃げ回る労働党会議の不気味な混乱。」という強調は、新聞記事ではテレビのニュース速報のように伝わらない。また議会討論のテレビ放送は何人かの議員のやや支離滅裂な演説と、その後にイギリス国会議事録の格式ばった文面に現れる比較的明瞭で筋道だった話し方とのくい違いを明らかにしている。

最後に、貴重なご助力を頂いた多くの方々に感謝を申し上げねばならない。クリストファー・ブッカー、サイモン・ヘッファー、ノーマン・リーズ、ピーター・ヘネシーは、第一次の草稿全体にすべて目を通して非常に多くのコメントや助言を与えてくれて、すぐに採用された。みな大変多忙な専門家であり、この仕事に快く割いてくれた時間と配慮の大きさは、喜びであるとともに驚きであった。

実際、この稀に見る幸福な仕事の側面の一つは、私が接した方々のほとんどすべてが、本辞典をできる限り完全かつ正確なものとするために、時間や手間を惜しまれなかったことである。特に、あるテーマや発言者についてご助力を頂いた方々、即ちバウアー卿、トニー・ベン、ジョン・バッフェン、ジョン・ブランデル、イーモン・バトラー博士、コヴェントリー大主教、ダークル卿、ディーデス卿、オリヴァー・エバ

レット、ミルトン・フリードマン、ノーマン・ガッシュ、マーティン・ギルバート、ヘンリー・ハーディ、ヒーリー卿、バーナード・イングハム卿、サイモン・ジェンキンス、バーナード・レヴィン、ケネス・モーガン、ナイジェル・ニコルソン、マシュウ・パリス、イノック・パウエル、スタンリー・ウェルズ、クリス・リグレーに、ここで特に感謝を申し上げたい。そして誰よりも、オックスフォード出版会引用句辞典部の編集チームに感謝したい。大変な仕事量の仕事を消化したばかりではなく、博識、専門技術、そして学問にかける情熱が本書の質を高めるためにどれほど貢献しているかは計り知れない。

最終的な結果である本書に対するいかなる称賛も、上記の人々と分け合うべきものである。しかし批判はひとえに編者のものである。

アントニー・ジェイ

サマセットにて、1996年1月

## 本辞典の使い方

項目の配列は発言者のアルファベット順である。通例は姓名に拠るが、帝政あるいは王政における称号、ペンネーム（「サキ Saki」）、あだ名（「カリギュラ Calligula」）で知られる発言者は例外である。発言者の名前は、基本的には最もよく知られた形を取ったため、本書ではハロルド・マクミラン Harold Macmillan（ストックトン卿ではなく）、メルボルン卿 Lord Melbourne（ウィリアム・ラムではなく）、H. G. ウェルズ H. G. Wells（ハーバート・ジョージ・ウェルズではなく）、ハロルド・ウィルソン（ジェームズ・ハロルド・ウィルソンではなく）となっている。発言者不明 Anonymous や聖書 Bible などひとまとめにされた項目も、アルファベット順に並んでいる。

発言者の名前〔見本①〕に続いては、(わかっていれば) 生年月日および没年月日〔同②〕、そして簡単な説明が置かれている〔同③〕。本書中の別の箇所に記載のある発言者についての引用句には、適宜、そちらを参照するよう注を施した〔同④〕。各発言者の項目の中では、引用句は日付に従って配列され、小説、戯曲、書簡、日記、演説から取られた素材が等しく年代順に並んでいる。(発言者不明の部はこの限りではない。この見出しのもとに集められた項目は、引用句の書き出しの言葉のアルファベット順に並んでいる。) 外国語の文章は、その訳文より原語での形の方が親しまれていると思われる場合には原語で記載されている(朕は国家なり。'L'État c'est moi')。

引用句はそれについての情報(書簡や日記の執筆年月日、書籍の出版年月日)がわかる限りは、正確な時日に合わせてある。しかしなかには、意見なり論評なりに結びついた出来事や状況の時日に合わせた引用句もある(エイブラハム・リンカンの暗殺に続くスタントン Charles E. Stanton の論評「今や(彼は)時代に属すことになった。」は、1865年の引用句としてある)。時日が不正確または不明な場合、また特定の出来事に関連していない場合は、発言者の没年を引用句の時日とするのを通例としてきている。いくつかの項目(ウィンストン・チャーチルの項など)では、そのような句が多いので、これらはアルファベット順に配列した('a' と 'the' は無視してある)。

引用句の十分な理解に必要な不可欠と思われる前後関係についての情報は、引用句に先だって注記してある〔同⑤〕。また理解の助けになるとと思われる情報は、引用句の後に※印で記した〔同⑥〕。引用句の出典についての書誌的事項は欄外に注記した〔同⑦〕。題名および出版年月日は示したが、詳細な文献情報は省いてある。引用句の出典を突き止めるためのあらゆる努力は尽くしてきたが、やむなく「伝聞」としたところ

もある。これは、一般にはある発言者の発言とされているが、正確に特定されていないことを示している。広く知られた項目は、完璧に特定できていないからといって削除するより、現状報告を添えて記載した方が、読者の便宜に供すると感じられたのである。

参照項目は、個々の引用句と項目全体の両方について示した〔同④〕。特定の引用句について参照せよという表示では、まず発言者の名前、次に引用句の番号の順になっている。

索引 原書には詳細な「索引」が100ページ以上にわたって付せられていたが、出版社の許諾を得て本書では割愛させていただいた。その代わりに、収載している発言者の一覧を巻末に付したことをおことわりしておく。(訳者)

[見本]

▶ 0519 政治の秘密? ロシアと有利な条約を結ぶことである。	<b>Otto von Bismarck</b>
※ 1863年、初めて政権を取って	オットー・フォン・ビスマルク (1815-98) ———— ②生没年
⑥補足説明	③人物紹介 ———— [ ドイツの政治家、またドイツ統一の殊勲者、新ドイツ帝国首相 (1871-90)
	④参照項目 ———— [ ビスマルクについて、テイラー 3771、テニール 3808 参照
	⑦出所、書誌の情報 ———— [ ◆A. J. P. テイラー『ビスマルク』 (1955) ◆プロシア議会での演説、 1863.12.18
▶ 0520 政治は厳密な科学ではない。	
▶ 0521 1866年のオーストリアープロシア戦争の後、プロシア側に、敗れたオーストリア人に対する制裁を求める声がある時に： オーストリアにとって、わが国の要求に反対するように仕掛けられる以上に悪いことはない。	◆A. J. P. テイラー『ビスマルク』 (1955)
⑤引用の前後関係を説明	
▶ 0525 ヨーロッパについて語る者は誰もが間違っています。〔これは〕地理的概念なのです。	◆ロシア首相ゴルチャコフからの書簡の欄外に書かれた注意書、1876.11、 <u>メッテルニヒ</u> 2703 参照
	④参照項目 ————

# Oxford

DICTIONARY OF  
**POLITICAL QUOTATIONS**

The world's most trusted  
reference books





## A

- ▶ **0001** 下院議員であることは、労働者階級の両親が自分の子供たちに望むタイプの仕事だ。汚れないし、屋内だし重いものを担ぎ上げることもない。
- ▶ **0002** リチャード・ニクソンは彼自身を弾劾した。その復讐として、私たちにジェラルド・フォードをもたらしたのだ。
- ▶ **0003** 憎ませておけ、彼らが恐れている限りは。
- ▶ **0004** 私が有難いことに儲かる仕事だと思われる職を探さねばならないのは確かだが、幸いなことに公職はそれにあたらぬ。
- ▶ **0005** 大英帝国はその帝国を失ったが、まだ自らの役割を見出しはしていない。
- ▶ **0006** 政治家に最も求められる資質は、鈍感であることだ。
- ▶ **0007** 回想録が書かれるのは、読者に情報を伝えるためではなく筆者を守るためだ。
- ▶ **0008** アイゼンハワー大統領について：  
読む本といえばもっぱら作品は素晴らしいかもしれないがゼイン・グレイ氏の小説であるような男が、インディアン問題を抱えるこの国の特に大統領にならんとすることには大きな懸念を感じる。
- ▶ **0009** 権力は崩壊するものであり、絶対権力は絶対的に崩

**Diane Abbott**

ダイアン・アボット(1953-)  
イギリスの労働党政政治家  
◆「インディペンデント」  
1994.1.18

**Bella Abzug**

ベラ・アブズグ(1920-)  
アメリカの政治家  
◆「ローリング・ストーン」、リ  
ンダ・ボッツの「放言」欄  
(1980)

**Accius**

アッキウス(紀元前170-同86頃)  
ローマの詩人、戯曲家  
◆「アトレウス」

**Dean Acheson**

ディーン・アチソン(1893-1971)  
アメリカの政治家  
アチソンについて、ピアソン  
3024 参照  
◆「タイム」1952.12.22  
◆ ウェスト・ポイント陸軍士官  
学校での演説、1962.12.5  
◆「オブザーヴァー」1970.6.21  
◆「ウォール・ストリート・  
ジャーナル」1977.9.8

◆ 伝聞

**Lord Acton**

アクトン卿(1834-1902)

壊します。

※しばしば「すべての権力は崩壊するものであり……」と引用される

▶ **0010** 偉大な人々はほとんどいつも悪党です。影響力を持つのみで権力者ではない場合でも。

▶ **0011** あなたはいずれ新憲法をお作りになる必要があるかと思いますが、そこでは女性のこともお忘れにならないことを願っています。これまでの世代の女性たちに対するよりもっと寛大で好意的であることも。その夫たちの手に、あのような際限のない権力を渡すことはしないでください。もしそれが可能となれば、すべての男性は暴君になり得ることを忘れないでください。

▶ **0012** 天才が生きたいと願う時代というものがあります。それは静かで穏やかな生活や、安寧秩序が続いた状況にはありませんが、そこでこそ偉大なる人格が形成されるのです……大変な窮乏こそが偉大なる美徳を涵養するのです。

▶ **0013** 女性の愛国心は、あらゆる美徳の中で最も関心の持たれていないものです。表彰されることも官庁からも除外されているので、私たちは国家や陽の当たる場所を得ることができません……しかし、すべての歴史あらゆる時代で、女性の愛国心という美徳の例は明らかです。これは私たちの存在があなた方の最も英雄的な存在と同等だと考えさせるに足るものです。

▶ **0014** 政治評論家が「考える頭のあるすべての人間」と言う場合には、自分たち自身のことを指している。そして立候補者が「すべての知的な有権者」という場合には、自分に投票してくれる人すべてを指している。

▶ **0015** この国の問題とは、あまりにも多くの政治家が、自分の体験に基づいた確信を持って、いついかなる時もあらゆる人々をだましていいと信じていることだ。

▶ **0016** 男であれ女であれ選挙に勝つのは、主に、ほとんどの人々が誰かを支持して投票するからというよりむしろ、誰かに反対して投票するからだ。

イギリスの歴史家

◆ マンデル・クレイトン僧正宛書簡、1887.4.3

◆ 同上

## Abigail Adams

アビゲイル・アダムズ(1744-1818)

アメリカ合衆国第2代大統領ジョン・アダムズの妻、ジョン・クインシー・アダムズの母

◆ ジョン・アダムズ宛書簡、1776.3.31

◆ ジョン・クインシー・アダムズ宛書簡、1780.1.19

◆ ジョン・アダムズ宛書簡、1782.6.17

## Franklin P. Adams

フランクリン・P. アダムズ(1881-1960)

アメリカのジャーナリスト、ユーモア作家

◆ 『うなずきと身振り』(1944)

◆ 『同上』

◆ 『同上』

▶ **0017** 政治とは口先ではなんと云おうとも実際には、常に憎悪で固まった体制である。

▶ **0018** 権力を持った友人はもはや友人ではない。

▶ **0019** [チャールズ・] サムナーの心は、ものの姿を受けとめ映し出しはするが同化はしないという、水の平静さの境地に至った。自分自身であるほかは何物も頭がないのだ。

※アメリカの政治家・演説家チャールズ・サムナーについて

▶ **0020** ワシントン大統領からグラント大統領に至る進化の過程は、ただダーウィン学説を混乱させる論拠であるだけだ。

▶ **0021** 現実の政治とは事実の無視にある。

▶ **0022** アメリカへの植民は、無知を啓蒙し地上のあらゆるところで奴隷となっている人々を解放するための、神意による偉大なる光景と計画の始まりであると、常に尊崇と驚きを持って考えている。

▶ **0023** 権力の類は常に貪り食らわんとして開かれ、その腕は思想表現の自由をできれば常に抑圧しようと伸ばされている。

▶ **0024** 自由は、知る権利を有し……知ろうと欲する人々に、一般的な知識がなければ維持できない。しかし人々はこれとは別に、奪うこともできず破棄もできない神聖なる権利を有する。それは、最も恐ろしく、羨むべき知識、つまり、私の言う為政者たちの人格および行状についての情報を得る権利である。

▶ **0025** すべての人間の存在が危険になり得る。自由な政府が唯一旨とすべきは、何人といえども生きて権力を持った人間が、公的自由を脅かさないなどと信頼してはならないということである。

▶ **0026** ボストン茶会事件について：

感嘆措く能わざる最近の愛国者たちの奮闘には、高潔さ、威厳、崇高さがある。人民が立ち上がれば、必ず何かしら

## Henry Brooks Adams

ヘンリー・ブルックス・アダムズ(1838-1918)

アメリカの著述家

◆『ヘンリー・アダムズの教育』  
(1907)

◆『同上』

◆『同上』

◆『同上』

◆『同上』

## John Adams

ジョン・アダムズ(1735-1826)

アメリカ合衆国初代副大統領・第2代大統領、ジョン・クインシー・アダムズの父、アビゲイル・アダムズの夫

◆『大砲および封建的法律論』  
(1765)への注釈

◆『大砲および封建的法律論』  
(1765)

◆『同上』

◆ プレーントリーにおける式辞  
(1772 春)への注釈

◆ 日記、1773.12.17

記念すべきこと——何かしら注目に値する素晴らしいことをなさずにはおかない。

- ▶ **0027** 法律による政府であり、人間の政府ではない。  
※後にマサチューセッツ州憲法に織り込まれた  
◆『ボストン・ガゼット』(1774)
- ▶ **0028** 政治に中庸はまったくの無意味であることは、おっしゃるとおりだと思います。  
◆ホレーショー・ゲイツ宛書簡、1776.3.23
- ▶ **0029** 昨日、アメリカにおいて討議された中でも最大の問題に決着がつかしました。人間がこれ以上大きな問題に決着をつけることは、これまでも、また今後もないでしょう。植民州の全州一致で可決されたこの決議とは、「植民州連合は、かくてあるべき権利を持って、自由で独立の国家たること」です。  
◆アビゲイル・アダムズ宛書簡、1776.7.3
- ▶ **0030** 社会の幸福が政府の究極の目標である。  
◆『政府についての思想』(1776)
- ▶ **0031** 恐怖がほとんどの政府の基盤である。  
◆『同上』
- ▶ **0032** 司法の権力は立法および行政の権力とは別個に、独立してあるべきである。さすれば司法はその両者の抑止力となり、また両者が司法の抑止力となり得る。  
◆『同上』
- ▶ **0033** 政治と戦争について研究しなければなりません。息子たちが数学と哲学を学ぶ自由を得られるように。  
◆アビゲイル・アダムズ宛書簡、1780.5.12
- ▶ **0034** 副大統領について：  
祖国は叡智を持って、かつて人類の創意工夫や想像力が考案し辿りついた中でも最もさえない執務室を、意図的に私にあてがっています。  
◆同上、1793.12.19
- ▶ **0035** 民主主義は決して長続きしません。すぐに衰弱し消耗し、自らを殺すに至ります。自殺しなかった民主主義は存在しないのです。  
◆ジョン・テイラー宛書簡、1814.4.15
- ▶ **0036** 私の政治的信念の基本簡条は、平民議会や貴族院の多数派であれ、寡頭制の結社や一人の皇帝によってなされるものであれ、専制政治、すなわち無制限の統治権や絶対権力は同じだということです。  
◆トーマス・ジェファーソン宛書簡、1815.11.13
- ▶ **0037** トーマス——ジェファーソン——がまだ生きて——  
※ トーマス・ジェファーソンは同日に死去  
◆臨終の言葉、1826.7.4

- ▶ **0038** 君たちの父祖を思いたまえ！ 子孫を思いたまえ！

## John Quincy Adams

ジョン・クインシー・アダムズ  
(1767-1848)

アメリカ合衆国第6代大統領、  
第2代大統領ジョン・アダムズ  
とアビゲイル・アダムズ夫妻の  
息子

- ▶ **0039** 「正義を行わしめよ、天滅ぶとも」。乾杯の挨拶は、  
我らが祖国の常に繁栄せんことを、繁栄するにしろしない  
にしろ常に正しくあらんことを、ということになるでしょ  
う。
- ▶ **0040** アメリカは国家としての自らの存在を発するのと同  
じ声で人類に対し、人間性が有する消すことのできない権  
利と政府の唯一の合法的基盤とを宣言する。
- ▶ **0041** アメリカは……ひとたび自分以外の旗印の下に参集  
すれば、たとえそれが独立の諸外国であっても、利害関係  
や陰謀、私利私欲、嫉妬、野望を粉飾し自由の旗を奪おう  
とする戦争に抜き差しならず巻き込まれることになるのを  
よく知っている。その政策の基本的原理が、自由から強制  
力へと気づかれぬうちに変化することになるだろう……自  
分が世界の独裁者となることだろう。もはや自分自身の精  
神の支配者ではなくなってしまうのだ。
- ▶ **0042** 個人の自由は個人の力です。コミュニティの力とは  
個人の力を結集したものであります。最も自由を謳歌でき  
る国家とは、必然的にこれに比例して最も力強い国でなけ  
ればなりません。
- ▶ **0043** 彼の書簡は、外交官の技法のすべてが、夕食会を催  
すことにあるのを論証しようとする論文だ。  
※合衆国スウェーデン公使であったクリストファー・ヒュー  
ズ宛のカニングの書簡について
- ▶ **0044** この家は、彼の敬虔さの証となるだろう。誕生の地  
であるこの町 [マサチューセッツ州ブレントリー] は気前  
のよさの、歴史は愛国心の、子孫は心の深みと広がり的那  
ぞれの証となるだろう。
- ▶ **0045** 上院で倒れた際に、1848.2.21 (2日後に死去) :  
これが、これが最期だ。満足だ。
- ▶ **0046** 父祖について、子孫についてよく考えてみよう。そ  
して父祖たちが私たちに残した権利を、後にも続くものた  
めに保持する覚悟を決めよう。
- ◆ プリマスでの演説、  
1802.12.22
- ◆ ジョン・アダムズ宛書簡、  
1816.8.1、ディケーター 1203、  
マンズフィールド 2629、ワト  
ソン 4042 参照
- ◆ 演説、1821.7.4
- ◆ 同上
- ◆ ジェームズ・ロイド宛書簡、  
1822.10.1
- ◆ 日記、1825、チャールズ・フ  
ランシス・アダムズ『ジョン・  
クインシー・アダムズの思い  
出』
- ◆ ジョン・アダムズの墓碑銘  
(1829)
- ◆ ウィリアム・H. セワード『ジョ  
ン・クインシー・アダムズか  
らニューヨーク議会への賛辞』  
(1848)

## Samuel Adams

サミュエル・アダムズ(1722-  
1803)

アメリカの革命派指導者

◆ 演説、1771

- ▶ **0047** レキシントンの銃撃を聞いて、1775.4.19 :

今朝はなんて素晴らしい朝だ。

※一般的には「アメリカにとってなんと素晴らしい朝だ」と引用されてきた

- ▶ **0048** 商業の国が、これほど私利私欲を持たないことなどほとんどあり得ない。

- ▶ **0049** 思想の自由および良心の個人判断の権利が、世界中のあらゆるところから、人々を最後の避難所としてこの幸福な国へと向かわせている。

- ▶ **0050** 私たちは事件を創作できない。私たちの仕事はこれを賢く改善していくことだ……。人間は理性よりむしろ感情に支配されている。感情を興奮させる出来事は、素晴らしい効果を生むものだ。

- ▶ **0051** スラの支配下にあったローマは、乗客の半分はこれを運転しようとし、もう半分は運賃を改定しようとしているバスのものであった。

- ▶ **0052** なんと残念なことか  
国のために死ねるのはただの1度であるとは!

- ▶ **0053** その時より、激しく争い合う国々に  
国内でぶつかり合う潮流が及ぼす恐ろしい効果を知らしめるがいい。

- ▶ **0054** 厚い面の皮は神の賜物だ。

◆J.K. ホスマー『サミュエル・アダムズ』(1886)

◆『フィラデルフィアでの大会演説』1776.8.1(この文章が本物であるかどうかは疑わしい)、ナポレオン 2833、スミス 3622  
参照

◆フィラデルフィアでの演説、1776.8.1

◆J.N. ラコヴ『国家政治の始まり』(1979)

## Frank Ezra Adcock

フランク・エズラ・アドコック  
(1886-1968)

イギリスの古典学者、ギリシャ・ローマ史研究家

◆ケンブリッジ大学の講義、1940年代

## Joseph Addison

ジョセフ・アディソン(1672-1719)

イギリスの詩人、戯曲家、エッセイスト、「スペクテイター」の創刊者の一人

◆『カトー』(1713)

◆『同上』

## Konrad Adenauer

コンラート・アデナウアー  
(1876-1967)

ドイツの政治家、ドイツ連邦共

- ▶ **0055** つまらぬ功利打算から純粹なる法を毒するなかれ  
政府の形をよく守護し、また尊崇せよ  
それこそが放埒と奴隷制の如きを避くるものなり。  
また汝が施策により恐怖を全く拭い去るなかれ  
なんとすれば、生きてる人の恐怖より免れたるがな  
お公正であり得べけんや？
- ▶ **0056** 何人も異邦人を責むるには急なり。

- ▶ **0057** 人を自由にする真実のそのほとんどは、人が聞きたく  
ないような真実だ。

- ▶ **0058** スラム街に入るつもりはない、などとは言っていない。  
そういう場所を多く訪れてきたが、ある意味ではこう  
言うべきだったかもしれない。スラム街を1つ見れば、す  
べてのスラムを見たに等しい、と。

- ▶ **0059** 国民的なマゾヒズムが蔓延しているが、これは厚か  
ましくも自分たちを知識人だと特徴づける懦弱な気取り屋  
連中が煽ったものだ。

- ▶ **0060** 今日の合衆国には、ぶつぶつ言う懷疑主義のお大尽  
が度はずれて多い。

- ▶ **0061** 人民の声は神の声だと主張し続ける人に耳を傾けて  
はなりません。なぜなら大衆の熱狂はいつもほとんど狂気  
に近いからです。

和国初代首相(1949-63)

◆「ニューヨーク・タイムズ」  
1959.12.30

## Aeschylus

アイスキュロス(紀元前 525 頃 -  
同 456)

ギリシャの悲劇作家

◆「エウメニデス」

◆「乙女たちの嘆願」

## Herbert Agar

ハーバート・エイガー(1897-  
1980)

アメリカの詩人、作家

◆『偉大さの時代』(1942)

## Spiro T. Agnew

スピロ・T. アグニュー  
(1918-96)

アメリカの共和党政治家、副大  
統領(1968-73)、メリーランド州  
知事時代の財政上の不正告発を  
受けている最中の、1973年10  
月10日に副大統領を辞任した

◆「デトロイト・フリー・プレス」  
1968.10.19

◆ ニューオーリンズでの演説、  
1969.10.19

◆ サン・ディエゴでの演説、  
1970.9.11

## Alcuin

アルクイン(735頃-804)

イギリスの学者、神学者

◆ 書簡 164、『作品集』(1863)所  
収

▶ **0062** 愛国心とは、集団としての責任を生き生きと感じているものだ。

国家主義は、愚かな雄鶏が自分の縄張りでしか作れないときの声だ。

▶ **0063** 富める男は己が城にあり、  
貧しき男はその門にあり、  
神彼らを作り給えり、あるいは高くまた低く、  
そしてその境遇を定め給えり。

▶ **0064** アメリカはバーで酒を飲むことにたとえられる。1分間は金や肉体を自慢している、1時間経つと失敗や希望のなさから愚痴を言い始める。今ちょうど泣き言を言っているところだ。

▶ **0065** 54対40、さもなくば戦いを！  
※ 1844年の大統領選における民主党の膨張主義者のスローガン、オレゴン州の州境が争点となっていた(1846年、民主党の新大統領ジェームズ・K. ポークは大英帝国と互いに49ずつで妥協した)

▶ **0066** 向こうから私たちを見張ってることはわかってる。  
残念ながら、それは政府だ。

▶ **0067** 感謝は愛と同様、決して当てになるような国際的な感情ではない。

## Richard Aldington

リチャード・オールディントン  
(1892-1962)

イギリスの詩人、小説家、伝記作家

◆『將軍の娘』(1931)

## Cecil Frances Alexander

セシル・フランシス・アレクサンダー(1818-95)

アイルランドの詩人

◆『ものみな輝きまた美わし』  
(1848)

## Henry Southworth Allen

ヘンリー・サウスワース・アレン  
アメリカの作家

◆『遠くへ行きすぎた』(1994)

## William Allen

ウィリアム・アレン(1803-79)  
アメリカの民主党政治家、合衆

国上院議員

◆上院での演説、1844

## Woody Allen

ウッディ・アレン(1935-)

アメリカの映画監督、作家、俳優

◆ピーター・マクウィリアムズ  
『君がやらなきゃ誰がやる』  
(1993)、伝聞

## Joseph Alsop

ジョセフ・オールソップ  
(1910-)

アメリカのジャーナリスト

◆「オブザーヴァー」1952.11.30



- ▶ **0068** H. H. アスキスについて：  
20年間というものの、最も抵抗の少ない路線の定期券を持って、諸問題という列車が自分を運んでくれるところならどこにでも行き、たまたまいることになった場所で自分の立場をどんなことであれ明快に正当化してきたのだ。
- ▶ **0069** イギリスのために話せ。
- ▶ **0070** 私はある人のことばを引用しようと思う。かなりの抵抗を感じるのだが、それは私の旧友や同僚を批評しようとしているからだ。しかしこの言葉が、現在の状況にも適切なものだと思う。クロムウェルが長期議会に対して、議会がもう国政を司るに適さないと考えたときに言った言葉だ。「あなたは世の中のため献身しようとしてここに長いこと座りすぎた。出ていけ、と言おう。私たちに処遇を任せよ。神の名にかけて、去れ！」
- ▶ **0071** 君主制は商船であり、早く走るがいずれ岩礁に乗り上げて海底に沈むのだ。一方共和国制はいかだであり、決して沈まないが乗っている国民の足は常に水中にある。
- ▶ **0072** 書かれた法律はくもの巣のようなものだ。捉まえることは確実だが、弱く貧しい者をであり、富裕かつ権力のある者には八方に破られるものだ。
- ▶ **0073** すべての人間はその尊厳と権利において自由かつ平等に生まれる。
- ▶ **0074** すべての「～主義」は時代遅れの理論だ。

## Leo Amery

レオ・アメリー(1873-1955)

イギリスの保守党政治家

◆「クォーターリー・レビュー」  
1914.7

◆ 下院でアーサー・グリーンウッドへの発言、1939.9.2、『わが政治人生』(1955)第3巻、ブースビー 579 参照

◆ 下院での発言、1940.5.7、クロムウェル 1150 参照

## Fisher Ames

フィッシャー・エイムズ

(1758-1808)

アメリカの政治家

◆ エイムズの下院での演説と伝聞、1795。R.W. エマーソンの『随想集』(第2シリーズ、1844)に引用されているが、出典をエイムズの演説と特定していない

## Anacharsis

アナカルシス

紀元前6世紀のスキタイの王子

◆ プルターク『対比列伝』[ソロン]

## Anonymous

発言者不明

◆ 『世界人権宣言』(1948)第1条

◆ ピーター・ヘネシー『ホワイ

- ※モロトフフリーイベントロップ協定調印に際して、ある外務省スポークスマンのコメントだといわれる、1939.8
- ▶ **0075** LBJと一っしょに行こう。  
※リンドン・ベインズ・ジョンソン支持のアメリカ民主党選挙スローガン
- ▶ **0076** 労働は自由を生む。  
※ダッハウの強制収容所の門に。後にアウシュビッツの強制収容所の門に掲げられていた
- ▶ **0077** 悪貨は良貨を駆逐する。
- ▶ **0078** 原水爆撲滅。  
※アメリカの反核運動スローガン
- ▶ **0079** 銃剣は、労働者が各人の最期に臨んで持つ武器だ。
- ▶ **0080** 原子力爆弾に対する最良の防御は、落ちる時その場にはいないことだ。
- ▶ **0081** 死ぬよりアカがいい。
- ▶ **0082** 若造にはガンと一発。
- ▶ **0083** 黒は美しい。
- ▶ **0084** ブラウンは鷹のように襲いかかってきた。グレイはねずみのように土台を掘り崩した。  
※19世紀中期に相次いでニュージーランド総督となったトーマス・ゴア・ブラウンとジョージ・グレイについてのマオリ族の評言
- ▶ **0085** 燃やせ、ベイビー、燃やせ。
- ▶ **0086** でもこれはとんでもないことですわ——あの人たちは労働党の政府を選んだけれど、この国は決してそんなものに賛成しません！  
※サボイ・ホテルで夕食を取っていた婦人、1945.7.26
- ▶ **0087** 不注意なおしゃべりは死を招く。
- ▶ **0088** 会社は巨大な利益の管理運営を行っていますが、それが何なのか誰も知りません。
- ▶ **0089** 彼らが策を感わせたまへ、
- トホール』(1990)
- ◆「ワシントン・ポスト」1960.6.4
- ◆ 碑銘、1933
- ◆ 経済原則の諺、王立取引所の設立者トーマス・グレシャム卿(1519頃-79)と伝聞
- ◆1953年以来、核軍縮キャンペーンに使用された
- ◆ イギリス平和主義運動のスローガン(1940)
- ◆『ブリティッシュ・アーミー・ジャーナル』寄稿、「オブザーヴァー」1949.2.20
- ◆1950年台後半の核軍縮キャンペーンのスローガン
- ◆ チャールズ・E.ウィルソンの防衛政策、「ニューズウィーク」1954.3.22
- ◆1960年代中期のアメリカ公民権運動のスローガン
- ◆『英国人名辞典』
- ◆ ロサンジェルス暴動の黒人過激派のスローガン、1965.8
- ◆ マイケル・シムソンズ、フィリップ・フレンチ(共編)『緊縮経済の時代、1945-51』(1964)
- ◆ 第2次世界大戦防諜ポスター
- ◆ 南洋景気の頃の会社案内書(1711)
- ◆ “God Save the King”(英国国歌)、

彼らが騙し手を打ち破りたまへ。

▶ **0090 危機？ どんな危機だ？**

※ジェームズ・キャラハンの1979年1月10日の意見を要約した言葉、「私は、ここに混乱が高まりつつあるという見方を、諸外国の人々が共有してくれるとは思わない」

▶ **0091 1つの領土、1つの国民、1人の指導者。**

※ナチス党スローガン

▶ **0092 国家は独自の憲法を保持する。我が国の憲法は暗殺で調整された絶対主義だ。**

※ロシアについて

▶ **0093 人間は、自国の国境内における移動と居住の自由という権利を有している。人間は、自国を含めてあらゆる国々を出国した自国に帰国する権利を有している。あらゆる人間は、他国において迫害から逃れる避難所を求めまたそれを享受する権利を有している。**

▶ **0094 強引な卑語削除。**

▶ **0095 油断のならないイギリス人たちを……皆殺しにする、フランス將軍たちの取るに足らぬ軍隊を蹴散らすのだ。**

※ドイツ皇帝ウィルヘルム2世の発言とされるが、ほぼ確実にイギリス人による捏造。「取るに足らぬ老兵たち」というフレーズで伝聞

▶ **0096 簡潔を尊び「共産主義者」という言葉に、ファシストまでも含めるという一般の使い方を踏襲してきた。**

▶ **0097 フリードリヒ大王がイエナの戦いから名誉の退却をした。**

※プロイセンの頑固な崇拜者たちが、1806年プロイセンがイエナでナポレオンに敗れたのはフリードリヒ(1786年死去)の戦略によるとしたもの

▶ **0098 幸せとは、平和にあって戦争について思いめぐらす町のことだ。**

※ヴェニス造兵廠に掲げられた碑銘

▶ **0099 伝令の天使たちが歌うのを聞け**

作詞者にはヘンリー・ケアリーを始めとする多くの人名が挙げられる

◆「サン」の見出し、1979.1.11

◆1930年代初頭

◆『ヨーロッパ諸国の政治的素描、1814-1867』(1868)で、エルンスト・フリードリヒ・ヘルベルト、ミュンスター伯爵が「理性的なロシア人」を引用して

◆『世界人権宣言』(1948)

◆リチャード・M. ニクソン大統領が下院の査問委員会に提出した大統領会話記録、1974.4.30

◆『イギリス派遣軍定例訓令集』への付け足し、1914.9.24、アーサー・ボンソンビー『戦時下の嘘』(1928)

◆ラドクリフ報告「公職における安全保証手続き」1962.4

◆ウォルター・バジヨット『英国憲法』(1867)

◆ロバート・バートン『憂鬱さの解剖』(1621-51)

◆クレメント・アトリーの書簡、

シンブソン夫人が我らが王を奪ったと。

※エドワード 8 世の王位放棄についての近代の童謡

▶ 0100 聞きましたか？ 首相が辞任して、ノースクリフが国王をお呼びしたそうですよ。

※新聞王にしてロイド＝ジョージ首相の不倶戴天の敵ノースクリフ卿がその後釜に座ろうとしているというジョーク (1919 頃)

▶ 0101 彼は何かに憑かれたように専門的な話ばかりした。

※グラッドストンの予算演説について

▶ 0102 議事録を書く人間こそが支配する。

▶ 0103 彼らを通してはならない。

※ 1916 年にフランス軍がヴェルダン防衛作戦で用いたスローガン

▶ 0104 私はイギリスを支持する。

※イギリス、サリー州サーピトンのコルト社の工場で労働者が新しく表現したスローガン。その後国政選挙に使われた

▶ 0105 ナッパー・タンディに会ったんだ、私の手を取って言った、

「なつかしい哀れなアイルランドは元気かい、どうやって辛抱してるんだい」

アイルランドほど悲惨な国は今まであったためしもない、

あそこでは男でも女でも緑色を身につけたといって首を括られる。

▶ 0106 よき国王チャールズの黄金時代には、忠義が害をなすことなどありませんでした。

私は熱烈な高教会派で、そのため昇進することができました。

信徒らに向かって日々説教しました、

王たちは神によって任命されたのであり、

敢えて異を唱えるもの、

聖別されたる王を害さんとする者は呪われると。

そしてこれが法なのです、私はこれを守り続けます、

私が死を迎える日までです、閣下、

王が統治され給う限り、

私はブレイ村の教区牧師であり続けます、閣下！

▶ 0107 決して投票しません。あの人たちを喜ばせるだけですから。

1938.12.26、ケネス・ハリス『アトリー』(1982)

◆ ハミルトン・ファイフ『ノースクリフ、素顔の伝記』(1930)

◆ G. W. E. ラッセル『収集と回想』(1898)

◆ 行政事務の格言

◆ ペタン元帥、ロベール・ニヴェル將軍などの発言とされている、イバルーリ 1966 参照

◆ 「ザ・タイムズ」1968.1.1

◆ 「緑の服を着る」(1795 頃のバラッド)

◆ 「ブレイ村の教区牧師」、『イギリス音曲集』(1734) 第 1 巻所収

◆ コメディアンジャック・パーが引用した年配のアメリカ女性の言葉、ウィリアム・サファイア『政治の新しい言

- ▶ **0108 鉄の女。**  
 ※反対陣営の指導者マーガレット・サッチャーに対して、ソ連防衛省新聞「赤い星」が冷戦を復活させようとしていると非難してつけた仇名
- ▶ **0109 町を救うために、破壊するのやむなきに至った。**  
 ※ヴェトナムのベン・トレについて。合衆国陸軍少佐のコメント
- ▶ **0110 これならピオリアでも演れる。**  
 ※ニクソン政権のキャッチフレーズ(1970年代初期)。意味は「アメリカ中流階級でも受け入れられる」
- ▶ **0111 またあの男だ……！ 黒い車を7台連ねた行列の先頭に立って、ヒトラーは昨夜ベルリンの首相官邸を堂々と出ていき行方不明となる。**
- ▶ **0112 海を渡りたもうた国王。**  
 ※退位し亡命したジェームズ2世および後継者に対するジャコバイト派の賞賛
- ▶ **0113 国王の情婦がウルジーの地元で離婚裁判。**  
 ※イプスウィッチでのウォリス・シンプソンの離婚訴訟についてのアメリカの新聞見出し
- ▶ **0114 労働党は働いていない。**  
 ※1978-79年の保守党ポスターの標語。職業安定所の外の長い列につけられていた
- ▶ **0115 政治的情熱を持ち合わせなかったで、そこを誰もしたことがない政治に無関係な執務室にした。**  
 ※労働大臣ウォルター・モンクトンについて
- ▶ **0116 人民のための土地。**
- ▶ **0117 リンドン・ベインズ・ジョンソン、リンドン・ベインズ・ジョンソン、今日は何人の子供を殺したの？**  
 ※リンドン・ジョンソン大統領時代の反ヴェトナム戦争のデモ行進スローガン
- ▶ **0118 観測気球を上げてみて、どんな反響を呼ぶか見てみよう。**
- ▶ **0119 自由！ 平等！ 博愛！**
- 語』(1968)  
 ◆「サンデー・タイムズ」  
 1976.1.25
- ◆AP通信、「ニューヨーク・タイムズ」1968.2.8
- ◆もとは1930年代に、ポピュラー音楽のミュージック・ホールで言われていたジョーク
- ◆「デイリー・エクスプレス」の見出し、1939.5.2、「またあの男だ」のITMA(It's that man again.)という頭文字は、1939年9月からBBCラジオ放送の番組名となった
- ◆18世紀に流布していた
- ◆フランセス・ドナルドソン『エドワード8世』(1974)
- ◆フィリップ・クレインマン『サアッチとサアッチの物語』(1987)
- ◆「ニュー・ステイツマン」  
 1954.1.8
- ◆共産主義者のスローガン、  
 1917頃
- ◆ジャクイン・サンダース『徴兵とベトナム戦争』(1966)
- ◆レジナルド・ローズ『十二人の怒れる男』(1955)、1960年代の定着した広告表現として記録されている
- ◆コルドリエ・クラブは1793.6.30

※フランス革命の標語(出所はそれ以前に存在)

- ▶ 0120 自由は常に終わりのない仕事だ。
- ▶ 0121 閉じられた扉の下から流れ出てくる血を見ている  
[ようだった]。  
※イースター蜂起事件の死刑執行ニュースの印象についての  
当時の表現
- ▶ 0122 ロイド＝ジョージは私の父さんを知ってたし、  
父さんもロイド＝ジョージを知っていた。
- ▶ 0123 失われしは古き良き時代の単純さ、  
世界は法に満ち溢れ、そして犯罪に満ち溢れている。
- ▶ 0124 こども：ママ、トリー党の人は拗けて生まれた  
の？ それとも生まれてから拗けて育ったの？  
母親：拗けて生まれて、育ってもっと悪くなったのよ。
- ▶ 0125 国民は、キリストとその聖者たちは寝ていたのだと  
言って憚らなかった。  
※イングランド国王をめぐるスティーヴンとマティルダの内  
紛期間の12世紀のイギリスについて
- ▶ 0126 大臣たちは閣議で2つのうち1つのことしか言わ  
ない。誰かが「ご覧下さい、首相、人手がありません」と  
言えば、他の人々は「同じく、私もです」と言うんだ。  
※サラ・ホッグが首相の政策部門の引継ぎをしようとした時、  
ある高級官僚が言った言葉
- ▶ 0127 あらゆる才能を集めた内閣。  
※1806年のウィリアム・グランヴィルの連立内閣につけら  
れたあてこすった呼び名、それ以降も使われた
- ▶ 0128 生きとし生けるもののうち最も死に近いのは  
デーヴィッド・パトリック・マクスウェル・ファイフ、  
でもその惨めな殻の下では、  
とんでもなく贅沢に暮らしてる。
- に以下の提議を決議した、「持  
てる者らは己が家の前面に大  
書せねばならない。共和国の  
統一と不分離、自由、平等、  
博愛か、さもなくば死を、と」、  
「ジュルナル・ド・パリ」182  
号(1795から「さもなくば死  
を、と」の言葉は削除)
- ◆「アメリカ自由連合組合年鑑」  
第36集の題名、  
1955.7.1-1956.6.30
- ◆ロバート・キー『われらのみ』  
(1916)
- ◆『キリスト教の兵士たちよ進め』  
の曲に乗せて歌われた2行滑  
稽詩、おそらくトミー・ライ  
ズ・ロバーツ(1910-75)作
- ◆『アメリカに対する訴訟』  
(1775)
- ◆G.W.E. ラッセル『収集と回想』  
(1898)
- ◆『1137年のアングロ-サクソ  
ン物語』
- ◆「サンデー・タイムズ」1995.4.9
- ◆G.W. クック『政党の歴史』  
(1837)第3巻
- ◆E. グリースン『郡判事の告白』  
(1972)

※後のキルミュー卿デーヴィッド・マクスウェル・ファイフについて。1930年代後半の北部巡回裁判の間言われ続けた

▶ 0129 座れる間は決してお立ちにならず、そしてお手洗いに立つ機会は決してお逃しになりませんように。

▶ 0130 議会の会議中はいかなる人の生命、自由、財産といえども安全ではない。

※ニューヨーク遺言検認後見裁判所のある裁判官の見解

▶ 0131 包囲されたデリーの防衛者たちがジェームズ2世軍に対して、1689.4

降伏はない!

※北アイルランドの抵抗のスローガンとして使われた

▶ 0132 さて閣僚たちは晚餐に去り、

秘書は残り、瘦せこける、

記録と報告に知恵を絞る、

閣僚らが考へておくべきだったと閣僚らが考へると閣僚らが考へるものの。

▶ 0133 カートライトという人物がロシアから奴隷を連れてきて、鞭打って尋問した。以下が決定・決議された、イングランドの空気は清浄すぎて奴隷などは呼吸できないのだ。

▶ 0134 秩序がワルシャワを支配している。

※反乱を暴力的弾圧した後には

▶ 0135 11月5日を忘ることなかれ、

火薬を使いし反乱と陰謀を。

火薬を使いたる反乱の

忘らるべき由はなし。

▶ 0136 王よりも王党派。

※当時のキャッチ・フレーズだが新しいものではないとの注釈あり。「ルイ16世治下に造られ、王党派の手をしばり、死刑執行人の腕を自由にしただけだった」

▶ 0137 人民に力を。

▶ 0138 かくして世の栄光は過ぎ行く。

※新法王の即位式で地上の栄光の移ろいやすさを象徴して、亜麻布が焚かれる時の言葉。

▶ 0139 聡明なる識者に向かって、合衆国大統領として示さ

◆ ジョージ5世か6世の私的秘書または侍従による助言

◆ 1866、不詳

◆ ジョナサン・バードン『北アイルランドの歴史』(1992)

◆ 発言者不明の詩、年代不明、S. S.ウィルソン『内閣官房』(1975)

◆ 「エリザベス1世の治世11年目」(1568.11.17-1569.11.16)、ジョン・ラッシュワース『歴史的文章集』(1680-1722)

◆ 「モニター」は「秩序と静けさが完全に首都に復活した」と報道、1831.9.16。同日外務大臣セバステアニア伯爵は「平和がワルシャワを支配している」と宣言した。

◆ 火薬陰謀事件についての古詩(1605)

◆ フランソワ・ルネ、シャトブリアン子爵『憲章にもとづく君主制』(1816)

◆ 黒人解放の急進的政治結社の運動スローガン、1968頃以降

◆ 1409.7.7、ピサのアレクサンダー5世の即位式で使われた、出所はより古い

◆ リンカンのゲティスバーグ演

れるべき人物の、ばかげた平板な中身の薄い発言。

▶ 0140 時は移り、我らもともに変わり行く。

▶ 0141 この世に軍隊より強いものが1つある。それは時流に乗った思想だ。

▶ 0142 ただの昼食などというものはない。

※1960年代以降のアメリカ経済の口承格言。ミルトン・フリードマンに関係が深い

▶ 0143 ヒュー・ダルトンの希有な薄青い目についてのある労働党下院議員のコメント：

目が何気なくじっと見つめ、不誠実さの底知れない深さを伝えて来る。

※時に「その目は不誠実さをはっきりと示している」と引用される

▶ 0144 うかつにも上院で読まれてしまった、閣僚向け指示：

これは腐敗した議論だが、あのお偉方たちが夏の暑い午後を過ごすには打ってつけというわけだ。

▶ 0145 クーリッジ氏を賞賛することにかけては人後に落ちないが、彼がピクルスで乳離れさせられたかのように見られなければならないと切に思う。

※カルヴァイン・クーリッジ大統領について

▶ 0146 3 エーカーと1頭の乳牛。

※自給自足の必要量とされる。急進派のジェシー・コリンズ(1831-1920)と、1885年に始まった彼の土地改良運動を想起させる

▶ 0147 男でも女でも十分悪いこと

共有の鷺鳥を盗むのは。

でもさらに言い訳なんてできやしない

誰かが鷺鳥から共有地を盗むのは。

▶ 0148 手や頭を使い労働者たちのために、彼らの産業の製造するすべての利益と最も平等な分配を確保することは、生産・分配・交換の手段が共有という基盤のうえでなら可

説に対する批評、「シカゴ・タイムズ」、1863.11.20、エヴェレット 1470 参照

◆ウィリアム・ハリソン『イギリスの描写』(1577)、「すべての物事は変わり行き、我らもともに変わり行く」という形で皇帝ロタール1世(795-855)の文と伝聞されている

◆「ネイション」1943.4.15、ユーゴー 1946 参照

◆最初の印刷された形としてはロバート・ハインライン『月は無慈悲な夜の女王』(1966)

◆パトリシア・シュトラウス『ベヴィンとその他のイギリス労働党の指導者たち』(1941)

◆ホーム卿『風の吹く道』(1976)

◆発言者不明、アリス・ローズヴェルト・ロングワース『ぎゅうづめの時間』(1933)

◆下院でジェシー・コリンズ、1886.1.26、ジョセフ・チェンバレンがさらに早くイーヴシャムでの演説(「ザ・タイムズ」1885.11.17)で使用していて、すでに諺となっていた

◆「共有地困いこみについて」、『オックスフォード滑稽詩集』(1938)所収

◆「労働党綱領」第4条(1918-26)、ブレア 554 参照



能であろう。

- ▶ **0149** 北アイルランドはノーと言う。  
 ※イギリス-アイルランド協定の返答として作られたスローガン、1985.11.15
- ▶ **0150** 資本主義の下では人間が人間を搾取する。  
 共産主義の下ではそれが反対になる。  
 ※1958年5月、J. K. ガルブレイスがポーランドに講演旅行をした折、ポーランド経済界に招待された夕食の席で聞かされたジョーク
- ▶ **0151** 戦争は人間が戦いを拒否した時に終わるだろう。  
 ※平和運動家のスローガン。しばしば「戦争」が複数形で引用される
- ▶ **0152** 私たちは以下の真理を自明の理と考える。すべての人間は平等に作られ、また創造主から一定の譲渡すべからざる諸権利を授けられており、その中には生命、自由、幸福の追求が含まれているということである。
- ▶ **0153** 我ら動かされず。
- ▶ **0154** われらは勝利する。  
 ※1946年、黒人の煙草労働者の抵抗歌として、また公民権運動の最中の1963年にも再流行した歌の題名
- ▶ **0155** 8隻ほしい、待つ気はない。  
 ※ドレッドノート型戦艦建造について
- ▶ **0156** 規律の行き届いた市民軍は自由国家の安全保障に必要不可欠であり、人民が武器を保持し携帯する権利は、これを侵害してはならない。
- ▶ **0157** 大統領は何を知っていて、いつそれを知ったのですか？
- ▶ **0158** 国が戦争になったら  
 浜の真砂ほど嘘を作り出す。
- ▶ **0159** 引金にかけるのは誰の指がいい？  
 ※労働、保守両党が、明らかな失策にもかかわらず指導者たちの一掃に失敗したと原子爆弾を関連づけた見出し
- ◆「アイリッシュ・タイムズ」  
 1985.11.25
- ◆J. K. ガルブレイス『われわれの時代』(1981)
- ◆1936年頃
- ◆「アメリカ独立宣言」、1776.7.4
- ◆労働権、人権の歌の題名  
 (1931)、以前から歌われていたゴスペルの歌詞から借用したもの
- ◆もともとアメリカ南北戦争以前からあったが、C. アルバート・ティンドレーがバプテスト派の賛美歌(「いつの日かわれらは勝利する」1901)として採譜した
- ◆ジョージ・ウィンダム の演説、「ザ・タイムズ」1909.3.29
- ◆合衆国憲法(1791年修正第2条)
- ◆特に上院ウォーターゲート調査委員会副委員長ハワード・ベイカーに関係したウォーターゲート事件当時の質問
- ◆アーサー・ポンソンビー『戦時下の嘘』(1928)の題辞
- ◆「デイリー・ミラー」1951.9.21

- ▶ **0160** 独占企業監視委員会がどうして1つしかないんだ？
- ▶ **0161** 無難な敵艦と十分な操艦の余裕。  
※ネルソン提督時代の海軍の格言
- ▶ **0162** 「ウィンストン復帰」  
※ウィンストン・チャーチルが海軍本部委員会第1軍事委員に再任された際、海軍本部委員会が艦隊に送った通信、1939.9.3
- ▶ **0163** 北部の男も女も奴隷保有者であり、南部の男も女も奴隷所有者である。北部が担う罪は南部と同等である。
- ▶ **0164** 女たちよ連合しよう、ともに同等の仕事に同等の賃金をと言おう。
- ▶ **0165** 独立宣言の最初の段落に、何よりも基本となる自然権として選挙権の肯定が主張されている。とすれば投票権が拒否されている場合、「統治される側の同意」がいかにして与えられるのだろうか？  
※選挙権裁判の前に発言、1873
- ▶ **0166** 彼〔筆者〕は政党の首脳たちに、自分自身の嘘を信じるなと警告する。
- ▶ **0167** 政党は最終的に自らの嘘をうのみにして死ぬ。
- ▶ **0168** 最も過激な革命とは、革命の翌日に保守になることだろう。
- ▶ **0169** 専制政治の統治下では、思考するよりも演じる方がはるかに楽だ。
- ◆ イギリスの落書き、「公的奇形乱痴気狂人党宣言」の一部、1987
- ◆ W. N. T. ベケット『海軍の慣習、表現、伝統および迷信あれこれ』(1931)、「慣習」
- ◆ マーティン・ギルバート『ウィンストン・S. チャーチル』(1976)第5巻

## Susan Brownell Anthony

スーザン・ブラウネル・アンソニー(1820-1906)  
アメリカの女性運動、政治運動家  
◆『奴隷保有者とは連合せずという演説』1857  
◆『ザ・レボリューション』1869.10.8  
◆『これは投票すべき合衆国市民に対する犯罪ではないのか?』

## John Arbutnot

ジョン・アーバスノット(1667-1735)  
スコットランドの医師、パンフレット作者  
◆『政治的嘘の技術』(1712)  
◆リチャード・ガーネット『エマーソンの生涯』(1988)

## Hannah Arendt

ハンナ・アーレント(1906-75)  
アメリカの政治哲学者  
◆「ニューヨーカー」1970.9.12  
◆W. H. オーデン『ある世界』(1970)

## ▶ 0170 介入せず。

※経済的営為には国家の介入を最小限にとどめるという原則を言うのに使われた用語

## ▶ 0171 かくして人間の善性は政治学の対象となるべきなのだ。

## ▶ 0172 私たちが平和に生きられるようにと戦争を起こすのだ。

## ▶ 0173 政治家にはまた安逸もない。なぜなら常に政治的生活それ自体を超えた権力と栄光、あるいは幸福を目指しているからだ。

## ▶ 0174 人間は本質的に政治的動物だ。

## ▶ 0175 社会で生きられないあるいは自己満足して生きる必要性を感じない人間とは、神か動物のどちらかであるに違いない。

## ▶ 0176 支配する人間がいるからには支配される人間がいるということは、必要であるのみならず都合のよいことである。ある種の人間は生まれた時から服従するように、その他の人間は支配するように定められているからだ。

## ▶ 0177 貧困は革命と犯罪の両親である。

## ▶ 0178 限られた人々が飛び抜けて裕福で他は無一物であるような国家では、結果として極端な民主主義か絶対的寡頭制が敷かれるか、あるいは両者の行き過ぎから専制政治が誕生してくる。

## ▶ 0179 最高に完璧な政治的共同体とは、中流階級が統治を行いまだ数において残り2つの階級にまざっているところに成立する。

## ▶ 0180 人間がお互いを信頼し始めない限り、専制君主は恐怖と無縁である。

## ▶ 0181 誤解を与えるような印象ではありますが、嘘ではありません。真実を簡潔に表現したものでした。

**Marquis d'Argenson**

ダルジャンソン侯爵(1694-1757)

フランスの政治家、政治評論家

◆『ダルジャンソン侯爵の未公刊回想録と記録』、ケネー 3159 参照

**Aristotle**

アリストテレス(紀元前 384- 同 322)

ギリシャの哲学者

◆『ニコマコス倫理学』

◆『同上』

◆『同上』

◆『政治』

◆『同上』

◆『同上』

◆『同上』

◆『同上』

◆『同上』

◆『同上』

**Robert Armstorg**

ロバート・アームストロング(1927-)

※ニュー・サウス・ウェールズの最高裁で裁判中の『スパイキャッチャー』出版問題の書簡についてふれて、1986.11

▶ 0182 行政の仕事とは国家の衰退を整然と管理することだ。

▶ 0183 私たちの社会は、野蛮人と俗物と一般大衆に分けられる。アメリカもわが国と同様だが、野蛮人は無視され、一般大衆もそれに近い状態だ。

▶ 0184 教養ある人間とは平等を進める真実の使徒である。

▶ 0185 貴族階級を俗物階級や中流階級と明確に区別したい場合には、心の中で前者を野蛮人と呼ぶことにしている。

▶ 0186 労働者階級というこの膨大な社会の一部分は、未熟かつ発展途上で貧困と悲惨さの中に半ば隠れつつ長らく横たわり、今やその隠れ場所から飛び出して自らの好むところを行うというイギリス人の天与の特権を主張し、好むところでデモを行い、好むところで集会を開き、好むところを叫びたて、好むところを打ち壊して我々を困惑させている——この膨大な人間の最下層民に大きな正当性をもって一般大衆という名称を与えよう。

▶ 0187 反乱については、古いローマの扱い方が常に正しいのです。兵士たちは鞭打ち見せしめにし、首謀者たちをタルペーイアの崖から突き落とすのです。

イギリスの公務員、行政長官 (1981-87)

◆『デイリー・テレグラフ』

1986.11.19、バーク 746 参照

### William Armstrong

ウィリアム・アームストロング (1915-80)

イギリスの公務員、行政長官 (1968-74)

アームストロングについて、ロスチャイルド 3311 参照

◆1973. ピーター・ヘネシー『ホワイトホール』(1990)

### Matthew Arnold

マシュー・アーノルド (1822-88)

イギリスの詩人、評論家、トーマス・アーノルドの息子

◆『文化と無政府状態』(1869)、序文

◆『文化と無政府状態』(1869)

◆『同上』

◆『同上』

### Thomas Arnold

トーマス・アーノルド (1795-1842)

イギリスの歴史家、1828年よりラグビー校校長、マシュー・アーノルドの父

◆1828年以前に書かれた未刊行

## 書簡

▶ **0188** 政治思想はフランスでは、回顧的であるか空想社会主義的であるかだ。

▶ **0189** 政治家としてワシントンにいるわけではない。国民の用を足す、きわめて報酬の高いメッセンジャー・ボーイとしてあそこにいるのである。主な仕事は支持者たちの仕事の分け前の源となる、小さなかけらを突き刺して集める棒を持って周辺をうろつくことなのだ。

▶ **0190** 動かずに様子を見た方がいい。

※ 1910年の演説に繰り返し使われた言葉。財政法案の通過を確実にするために貴族院が新しい自由党の貴族たちで溢れかえるのではないかという噂について

▶ **0191** [迫り来る戦争については] 幸いなことに、われわれが見物人以外のものになるべき何の理由もないように思っています。

▶ **0192** この剣を軽々しく抜いたわけではない。ベルギーが完全にこれまで犠牲にしてきたものすべてに勝って回復し、フランスが侵略者の攻撃から十分安全に守られ、ヨーロッパのより小さい国々の権利がゆるぎない基盤の上に置かれ、そしてプロイセンの軍事支配が完全にまた最終的に破壊されるまでは決して剣を鞘に納めはしない。

▶ **0193** イギリスの制度の揺るぎなさを実例に示す事例は、下院において他にない。

▶ **0194** 首相の執務室はその主が選び、何かを成し遂げることができるところだ。

▶ **0195** [陸軍省は3種類の人物たちに分かれている。] 1つは世間を迷わせ、1つは内閣を迷わせ、3つ目は自分自身

**Raymond Aron**

レイモン・アロン(1905-)  
フランスの社会学者、政治ジャーナリスト  
◆『知識人の阿片』(1955)

**Henry Fountain Ashurst**

ヘンリー・ファウンテン・アッシュルスト  
アメリカの政治家  
◆ トーマス・C.ドネリー『ロッキーマウンテンの政治』(1940)、伝聞

**Herbert Henry Asquith**

ハーバート・ヘンリー・アスクイス(1852-1928)  
イギリスの自由党政治家、首相(1908-16)  
アスクイスについて、チャーチル 951、ヘネシー 1855 参照  
◆ ロイ・ジェンキンス『アスクイス』(1964)  
◆ 1914.7.24『ヴェネチア・スタンレーへの手紙』(1982)  
◆ ロンドン市庁舎での演説、1914.11.9  
◆『議会の50年』(1926)第2巻  
◆『同上』  
◆ アリスティア・ホーン『栄光の代償』(1962)

を迷わせる。

▶ **0196** この無名の首相 [ボナー・ロー] を、無名兵士のそばに葬っておくべきだったというのは適切だ。

▶ **0197** ボールドウィン内閣の砂丘地帯にそびえる、チンボラソ山かエヴェレスト山だ。

※ウィンストン・チャーチルについて

▶ **0198** 1905年の自由党執行部人事を策定していたキャンベル＝バナーマンが、R. B. ホールデーを大法官ではなく内務大臣にしようとしていたことを聞いて：

ジョージ・エリオットの言葉を思い出した。「ある人が桃を欲しがっている時に、一番大きな南瓜をあげてもしかたがない」って。

▶ **0199** キッチンナーは立派なポスター。

▶ **0200** どんな教育も女性を第1級の政治家にすることはできません。女性が首相になるのをあなたは見ていられますか？ 私にはこの島々にとって、ダウニング街10番地にいる女性の指導下におかれること以上の不幸など考えられません。

▶ **0201** バーケンヘッド卿はとても聡明だけれど、頭は時々しか働かない。

▶ **0202** ベルトの下のお腹を叩かないとベルトが見えない。

※ロイド＝ジョージについて

▶ **0203** ナンシー・アスター：あなたの妻だったら、あなたのコーヒーに毒をいれますよ。

ウィンストン・チャーチル：あなたの夫だったら、飲みますよ。

▶ **0204** どの戦争の後にも、救済できる民主主義はごくわずかしかない。

◆ ロバート・ブレイク『無名の首相』(1955)

◆ ロイ・ジェンキンス『アスキス』(1964)

## Margot Asquith

マーゴット・アスキス  
(1864-1945)

政治好きの夫人、ハーバート・アスキスの妻

◆ ロイ・ジェンキンス『アスキス』(1964)

◆ 『さらなる回想』(1933)

◆ 『非公開発言』(1943)

◆ 「リスナー」1953.6.11、ヴァイオレット・ボナム・カーター夫人「マーゴット・オックスフォード」

◆ 「同上」

## Nancy Astor

ナンシー・アスター(1879-1964)  
アメリカ生まれのイギリスの保守党政治家

◆ コンシェエロ・ヴァンダービルト『金びかと金』(1952)

## Brooks Atkinson

ブルックス・アトキンソン  
(1894-1984)

アメリカのジャーナリスト、批評家

◆ 1.7、『ひとたび太陽をまわって』

- (1951)
- ▶ **0205** いつの世代にも「古き良き時代」は神話だ。誰もその時代の自分自身は良かったとは思わない。なぜならいつの世代もその時代を生きていた人々にとっては、耐えがたいように見える危機で構成されていたからだ。
- ▶ **0206** 資本および労働の共有利益ということについて、ずいぶん多くのもったいぶったお説教が行われている。現状では、唯一の共有利益とはお互いの喉を切り裂き合うというものだ。
- ▶ **0207** モーズレーはなぜいつも我々に向かって、まるで自分が封建領主で地代の支払いの遅れている小作人を罵るかのように話すのだろうか？  
※議会労働党の集会で、1930.11.20。オズワルド・モーズレーが党を追われる2～3ヶ月前に
- ▶ **0208** そちら側が沈黙を守る期間は歓迎されるでしょう。  
※労働党党首ハロルド・ラスキからの書簡への返事。ラスキの書簡はアトリーに、国会労働党が新指導者を選出するまで新内閣を組閣しないように(2度にわたって、長々と)依頼していた
- ▶ **0209** 国王が君に内閣を組閣せよとおっしゃったら、答えは「はい」か「いいえ」だ。「後でお知らせします!」ではない。
- ▶ **0210** 独り言は決定ではない。  
※内閣に何度も提出されてきた事案に、不平を言ったウィンストン・チャーチルに対して
- ▶ **0211** 聞いたのはチャーチル氏の声だが、その精神はビーヴァーブルック卿のものだ。
- ▶ **0212** 閣議で住宅供給大臣アネイリン・ベヴァンが自分の建設計画に必要なだけの人材を得られなかったと不平を言った時：  
ベヴァン：私の計画に必要な人々はみんなどこにいるんだ？  
アトリー：家を探しているんだよ、ナイ！
- ▶ **0213** いつも大口をあけている男だったな。

◆2.8、『同上』

◆9.7、『同上』

## Clement Attlee

クレメント・アトリー(1883-1967)

イギリスの労働党政治家、首相(1945-51)

アトリーについて、チャーチル 1027、1045、ヘネシー 1855、ニコルソン 2857、オーウェル 2920 参照

◆ヒュー・ダルトン『政治日記』(1986)、1930.11.20

◆ハロルド・ラスキへの書簡、1945.8.20、フランシス・ウィリアムズ『ある首相の記憶』(1961)

◆ケネス・ハリス『アトリー』(1982)

◆フランシス・ウィリアムズ『ある首相の記憶』(1961)

◆ラジオ放送の談話、1945.6.5、『同上』

◆マイケル・フット『アネイリン・ベヴァン』(1973)第2巻

◆ケネス・ハリス『アトリー』

※予算案漏洩の後に大蔵大臣を辞任したヒュー・ダルトンについて

(1982)

▶ 0214 どんな広報のプロにとっても私は困りものだ。宣伝できるようなものを何も持っていない。

◆ ハロルド・ニコルソン『日記』  
1949.1.14

▶ 0215 他のあらゆる国々と違うイギリス人の特徴は、古いボトルを破裂させずに新しいワインを注げるところだと思う。

◆ 下院で、1950.10.24

▶ 0216 労働大臣の回想録に「われわれは内閣の提案を読んだ」とあるのに応じて：

内閣は提案するのではない、決定するのだ。

◆ トニー・ベン『日記』1974.5.20

▶ 0217 良心の声はまだ小さく、また大声で話すものでもないと感じている。

◆ 伝聞、1955

▶ 0218 [ロシア共産主義は] カール・マルクスとエカテリーナ女帝の私生児だ。

◆ オルフス大学での演説、  
1956.4.11、「ザ・タイムズ」  
1956.4.12

▶ 0219 競争相手とさえ思った者はほとんどいなかった  
自分の方が頭がいいと思った者が多かった  
しかし彼は最後には首相  
名誉勲爵士にしてメリット勲位。

◆ ケネス・ハリス『アトリー』  
(1982)

※トム・アトリー宛書簡で自分自身について、1956.4.8

▶ 0220 マスコミは概ね災難を糧にして生きている。

◆ 伝聞、1956

▶ 0221 民主主義とは討論による政府を意味している。しかし国民の話しているのを止められる時のみ有効である。

◆ オックスフォードでの演説、  
1957.6.14

▶ 0222 しばしば「専門家」はその専門分野にあって、最悪の大臣を誕生させる。この国では素人に統治される方が好ましい。

◆ 同上

▶ 0223 よい犬を飼っていれば、自分で吠えることはないというのは正しい格言だ。私はアーネスト・ベヴィン氏という大変便利な犬を飼っている。

◆ 伝聞、1960

▶ 0224 政治という技術の定義：

限定された時間内で不十分な知識に基づいて、重要な決定を下すために必要とされる判断。

◆ 伝聞

▶ 0225 奇妙な鳥、ハリファックス。とてもユーモラスで、みんなで狩って聖餐式に捧げる。

◆ インタヴュー、ピーター・ヘネシー『2度目はない』(1992)

※ハリファックス卿について

▶ 0226 公的の顔にある私的な顔は  
より賢くより素敵だ  
私的な顔にある公的な顔よりも。

### W. H. Auden

W. H. オーデン(1907-73)

イギリスの詩人

◆『雄弁家』(1932)、『献身』



- ▶ **0227** 国家のようなものは他にない  
そして誰もが一人ではいられない。  
飢えは何の選択も  
市民や警察に許さない。  
われわれはお互いを愛さなければ死ぬのだ。  
◇「1939年9月1日」(1940)
- ▶ **0228** 世論調査をする研究者たちは満足している  
自分たちが時節に合った意見を持っていることに。  
平和であれば平和に賛成し、戦争があれば去って  
いってしまう。  
◇「無名の市民」(1940)
- ▶ **0229** この大理石の記念碑は国家が建てた。  
彼は自由だったか？ 幸せだったか？ そんな問い  
は馬鹿げたものだ  
何が間違っていたのなら、はっきりと聞くべき  
だったのだ。  
◇「同上」
- ▶ **0230** 彼は人間の愚かさを自分の掌のようによく知って  
いて、  
そして軍隊や艦隊に大変な興味を抱いていた。  
彼が笑えばご立派な上院議員たちが大笑いし、  
彼が泣けば小さな子供たちが路上で死んだ。  
◇「ある暴君の墓碑銘」(1940)
- ▶ **0231** あなたの世界を救うためにこの男に死んでくれと頼  
んだ  
この男がもし今あなたに会えるとしたら、どうして  
かと聞くだらうか。  
◇「無名兵士のための墓碑銘」  
(1955)

## Augustus

- ▶ **0232** クインティリウス・ウォルス、我が領土を返せ。  
※クインティリウス・ウォルスの支配下にあったローマの3  
州がゲルマンの首長アルミニウスに全滅させられた後に  
アウグストゥス(紀元前63-紀元14)  
初代ローマ皇帝  
アウグストゥスについて、ケケ  
ロ 1058 参照  
◇ スエトニウス『シーザーの生  
涯』  
◇『同上』
- ▶ **0233** 煉瓦としてこれを受け継ぎ、大理石として残したと  
自賛してもいいだろう。  
※ローマの街について

## Marcus Aurelius

- ▶ **0234** 男よ、お前は这个世界都市の市民であったのだ。そ  
れが5年であろうと50年であろうと何だというのだ？  
マルクス・アウレリウス  
(121-180)  
161年よりローマ皇帝

- ▶ 0235 政治からなら、沈黙までは軽い一歩だった。

## B

- ▶ 0236 また知識それ自体も力であるからだ。
- ▶ 0237 発明が持つ力と価値と行き着く先とを観察するのは賢明なことだ。そしてわれわれの祖先が知らなかったこの3つの発明以上に、はっきりとそれらを見せてくれるものはない。しかしその始まりは、最近のことなのだが、曖昧で不明確である。すなわち印刷、火薬、羅針盤である。3つの発明は、ものごとの形態や状態を全世界的にすっかりと変えてしまったのだ。
- ▶ 0238 人間を崇拜することは崇拜されることだ。
- ▶ 0239 行政において。何が最初に来るか？ 厚顔さだ。2番目と3番目に来るのは？ 厚顔さだ。しかしそれは、無知と下劣さの子供なのだ。
- ▶ 0240 トランプカードを束ねることはできるが、遊ぶのは下手だという [人々がいる]。かくしてこきおろしや陰謀は得意だが、それ以外は弱いという人々もいるわけだ。
- ▶ 0241 狡猾な人間を賢明とみなす環境ほど、悲惨な事件を起こすことはない。
- ▶ 0242 ものごとの始まりと終わりの時を心得ること以上に賢明な知恵は、地上に存在しない。
- ▶ 0243 王子たちの責務には困難が多くそれも大きいのが、最大の問題は時に彼らの頭の中にある。
- ▶ 0244 高位にある人々は三重の意味で従僕である。君主あるいは国家の従僕、名声の従僕、仕事の従僕だ。

## ◆『内省録』

### Jane Austen

ジェーン・オースティン

(1775-1817)

イギリスの小説家

◆『ノーサンガー寺院』(1818)

### Francis Bacon

フランシス・ベーコン(1561-

1626)

イギリスの法律家、廷臣、哲学者、評論家

◆『聖なる瞑想』(1597)、「異端について」

◆『新機関』(1620)

◆『科学の尊厳と拡大』(1623)

◆『隨想』(1625)、「図太さについて」

◆『同上』、「狡猾さについて」

◆『同上』、「同上」

◆『同上』、「遅れについて」

◆『同上』、「帝国について」

◆『同上』、「高位について」